里山の環境学を現場から立ち上げるために
東京都Ｈ市Ｈ地区における＜せめぎ合う＞里山の可能性

Creating Field-Based Environmental Studies for Satoyama: The Possibilities of Satoyama Reflecting "Cross-Values" in H area, H City, Tokyo

学籍番号　47－116724
氏　　名　岡田 航（Okada, Wataru）
指導教員　鬼頭 秀一 教授

１．問題関心

近年、「里山」という言葉が、環境政策の世界において、保全すべき重要な環境だとして盛んに使われるようになってきている。2010 年に開催された第 10 回生物多様性条約締約国会議では、里山イニシアティブが世界に向けて発信された。国内向けの政策レベルにおいても、生物多様性条約に基づき制定されている生物多様性国家戦略には、里山は生物多様性が育まれてきた重要な場所であり、その保全をしていくことの重要性が訴えられるようになっている。2010 年には、この生物多様性国家戦略の分野別実行計画として、「里地里山保全活用行動計画」が作成され、里山保全のための具体的な指針が示されている。

こうした政策レベルにおいて、「里山」という言葉がどのように使われているか、里山を保全しなければいけない理由を辿っていくと、「里山の持続可能性」や「里山との共生」というキーワードが里山の豊かさとして言い表され、そのような共生関係が失われたから現在、里山の危機が起こっているのだということが見て取れる。

こうした「持続可能な里山」、「共生する里山」という概念は、里山という環境を歴史的にたどっていくと、共生していない歴史を見つけ出すことは容易であり、こうした概念は里山を実体として見ているのではなく、里山を保全していくために意図的・戦略的に作られたフレーズであるであることが分かる。

このような里山概念の背後にあるのは、「里山の荒廃」ということが、「里山の危機」であると問題視され、「健全」な里山へと里山を「再生」しなければいけないということである。政策論的な「里山概念」は、そこから概念が作られているために、里山を考える際、自然科学的な価値が優越してしまうことになる。

保全生態学を筆頭とした自然科学の分野においては、生物多様性が豊かになれば、人間の生活も豊かになるという認識がおおむね共有されており、そこから、生物多様性の価値の有用性が唱えられたり、そうした有用性を定量化するべく「生態系サービス」という概念が生み出されたりしている。

しかし、人文社会科学の分野において、自然保護政策を進めていき、生物多様性が豊かになったものの、人間の生活に不具合が生じてしまったり、生活そのものが破壊

されてしまうという事例が報告され始めた。また、里山ボランティアにおいて、現場レベルでの参加動機は多様であるのに、理念レベルにおいて生態学的価値が優越するために、ボランティア活動の方向性がそちらに水路づけられてしまい、「里山とのかかわりによって人びとの生活の質がどのように高まるのかという広義の福祉的な観点」（松村，2007，143－157）が捨象されてしまいかねない現状を問題視している。

こうした問題を乗り越えるためには、「荒廃した」里山概念とは異なる視点から、新しい里山概念をつくり出していく必要がある。そしてそれは、実際に人びとと里山が関わっている現場からつくりあげられなければならない。なぜなら、生物多様性の豊かさと人間の生活の豊かさが一致しない事例では、現場の人びとの姿を抽象化する、全体的なシステムの中から捉えるような環境政策と、現場のリアリティの間の齟齬が、問題を生んだと考えられるからである。

こうした現場のリアリティから里山を見ていくと、「放棄」されたことによって、人と里山とのかかわりが断絶したとする里山像とは異なる里山の姿がみえてくる。人文社会科学の研究から、里山のような二次的環境が「荒廃」しているにもかかわらず、そこにかかわる人々のなかでは、意味あるものとなっているという場合もあるということが分かってきた。そこでは、里山の機能というものは、普遍的にあるのではなく、里山に関わる人々の認識の中から生成されてくるのである。里山を自然科学の分野で議論されているような、里山が「健全」であれば普遍的にあるとされる機能面からのみ見ていく限り、こうした里山の意味は零れ落ちてしまうのである。

そこで本研究では、里山が人々の間でどのような意味づけがなされ、外部からのポリティクスが降りかかってくるなか、里山の機能がどう生成され、変容していくのかという、ダイナミズムを分析していくこととする。

２．Ｈ地区の概要

本研究では、東京都Ｈ市Ｈ地区を事例地として研究を行うこととする。Ｈ地区は、その大部分が多摩ニュータウン建設区域に指定された。南部はすでに開発が進み、市街化している。区画整理が行われ、商店が立ち並び、住宅が林立する、いわゆるニュータウンの光景である。

一方、北部はかつての農村集落のような様相を色濃く残している。集落には雑木林も多く残り、都内では貴重になった植物が今なお生育している。養蚕や畜産も行われ、田畑の面積も多い。Ｈ地区の北端にあるＭ谷戸にはとくに豊かな自然が残り、東京ではなかなかみられなくなってしまった生物が多数生息している。

Ｈ地区では、激しい多摩ニュータウン建設反対運動が起こり、その後は里山ボランティア活動が行われてきた。

3. Ｈ地区における、＜せめぎ合う＞里山

本研究では、里山の＜意味づけ＞という概念を用いて、Ｈ地区における人びとと里山との関係の変容を捉えなおしていきたい。里山の＜意味づけ＞とは、平たくいえば、里山に関わる人びとが、それぞれの時代のなかで、里山に対して、どのような役割を

里山に対して与えたいと考えているかという、人びとの認識のことである。そして、多様な＜意味づけ＞や、外部からもたらされるポリティクスが重層的に折り重なり、折り合いがつけられることによって、その時代の人びとと里山の関係が出来あがり、そこから里山の機能が生成されるのではないかと考えたい。

①農村時代の里山への＜意味づけ＞

Ｈ地区は日当たりのよい南斜面に位置し、土壌は豊富で、多摩地域においては例外的に、水に恵まれた土地であり、農業生産性が高い場所であった。その自然が農業だけでなく、住民たちに魚や鳥といった食料、薪炭や肥料といった資源をもたらしていた。一方、丘陵地で農業を行うためには重労働を必要とし、子どもたちまで１日に大量にかごを編まなければいけないなど、苦しみを感じさせる場でもあった。

この時代の里山は、生業の場でもあり、「遊び仕事」（鬼頭，2009，1－22,）の場でもあるなど、里山には多様な＜意味づけ＞がなされていた。

戦後になると、農業構造の変容が起こった。農業の機械化、近代化も進み、「荒廃」する里山もあらわれはじめた。しかし、化学肥料を数年で落ち葉堆肥に戻す農家もいるなど、急激な変化にとまどいと模索を行っていた時期であると思われる。

②ニュータウン建設反対運動と里山への＜意味づけ＞

多摩ニュータウン建設計画がＨ地区に降りかかると、Ｈ地区では一斉に反対運動が起こった。すると、農薬や除草剤の使用を「申し訳ないことをした」と言ってやめたり、当時斜陽産業といわれ、全国的にその生産が激減していた養蚕を、「地域の文化を守る」と言い、頑としてやめなかった農家もいた。近代化を目指していた農家たちも「先祖の土地を守る」といって以前の農法に戻したのである。こうした行動の背景には、それまで当たり前にあったゆえに意識することのなかった里山の姿が、ニュータウン開発という、それまで里山との間に蓄積されてきた「空間の履歴」（桑子，1999）を一気に抹消してしまう力が押し寄せてきたために、それまで人びとの意識のなかにあった里山像が顕在化し、里山への＜意味づけ＞の変容をもたらしたのだと考えられる。

一方、酪農家たちにとっては、里山は今でも重要な生活基盤であり、ニュータウンができてしまえば匂いの問題等で酪農の存続が危うくなることから、とくに激しくニュータウン建設反対運動を行った。ここには、生業のための里山という＜意味づけ＞がなされていたと考えられる。

③里山のせめぎ合いと、里山ボランティア活動

長年に及ぶ多摩ニュータウン建設反対運動によって、Ｈ地区の一部はニュータウン建設区域から除外されることとなる。しかし酪農家たちにとっては、周囲にニュータウンができたのでは、酪農が存続できる保証はない状態のままであった。このとき、農業公園構想がＨ地区に持ちかけられる。酪農家にとって里山ボランティア活動とは、酪農を存続させていく便宜として位置づけられていたのである。この過程のなかで結

成された里山ボランティア団体「Ｙクラブ」には多くの地元住民も参加した。アイデンティティのよりどころで自然が目の前で失われていくなかでも、何らかの形で里山に＜意味づけ＞を与え、里山と関わろうとする思いが里山ボランティアに駆り立てたと考えられる。Ｈ地区の里山ボランティアはこうした＜意味づけ＞や、外部からのポリティクスの結節点として作り上げられたといえるだろう。

④Ｈ地区の里山の今

このようにして結成・発展し、地域づくりの優良事例といわれた「Ｙクラブ」であったが、そうした「一時的な同意」（富田，2010，79－93）はやがて崩壊する。規模の更なる拡大と、Ｈ地区全体をも視野に入れた地域計画を行う都市計画家に対し、クラブのメンバーであった一部のＨ地区住民が反発し、里山ボランティア活動は分裂してしまうのである。

「Ｙクラブ」は大幅に規模を縮小させるものの、今度はＨ地区住民主導による里山ボランティア活動が複数誕生した。そこでは、Ｈ地区住民とニュータウン住民の里山への＜意味づけ＞の結節点としての里山として、里山の機能が新たに生成され、政策論的にいわれる里山像も便宜として取り入れる形で、今の里山の姿が作り出されているのである。

4. 結論

Ｈ地区では、その時代時代において、外部から押し寄せるポリティクスに対して、里山に関わるそれぞれの人びとが、里山に対する＜意味づけ＞を行ってきた。その意味づけを行う背景には、生業を行う過程において、身体に刻み込まれた自然への思いが、里山への意味づけを行ううえで大きな要素を占めている。そして、そのような時代ごとに、人びとの認識が、外部からもたらされたポリティクスとせめぎあうなかで、重層的に積み重なって作り上げられていったのが、Ｈ地区における里山だったのだ。

そのような里山像は、現在政策論的な立場において取り上げられている、自然と持続可能な形で共生するというような里山像とも、里山に関わってきた人びとが里山を放棄し、荒廃してしまったことをネガティブに捉えようとする里山像とも異なる。荒廃している、いないに関係なく、里山と関わろうとする人びとが、里山を意味あるものにしていこうとする意義がある。このような意義は、里山を生態学的な価値からのみ見ようとしている限り、零れ落ちてしまうのである。そこで、このようなダイナミズムのもとに作り上げられていく里山を、＜せめぎ合う＞里山と名づけ、荒廃する里山とは異なる概念としてここに提示したい。

参考文献

桑子敏雄，1999,「環境の哲学」講談社.
鬼頭秀一，2009,「環境倫理の現在―二項対立図式を越えて」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』1－22，東京大学出版会.
富田涼都，2010,「自然環境に対する協働における「一時的な同意」の可能性」『環境社会学研究』16，79－93.
松村正治，2007,「里山ボランティアにかかわる生態学的ポリティクスへの抗い方」『環境社会学研究』13，143－157.